

団体名

名古屋水域活用研究会(仮)

団体概要

名古屋近傍の水域を活かした街づくりや舟運、その遺構の維持保全の重要性を示唆するために、身近な水域を舟で航行して、気軽に安全な接岸・乗下船できることを確認する。市街地から東海道・七里の渡しの舟旅に自由に出発できることを全国の街道愛好家に広めて活性化につなげる。

活動名：堀川の舟運遺構での和船による接岸及び乗下船実験

R2活動【接岸・可航条件調査、関係者調整・運航実績の確保】

1 活動の目標と達成度合い

- 五条橋下流にある材木店に接する護岸に船外機付き和船[L:7.85m13名乗]で接岸実験を行って、舟運遺構のある建物から、安全に直接乗下船可能であることが確認できた。
- 希望者への参加呼び掛け、街道愛好家への広報を行える下地は出来たと評価できる。



開催日時 2020年10月24日(日)10h~14h [小潮]

2 活動の成果（活動を通して得られた成果）



名古屋駅から徒歩15分の堀川から小型船であれば、比較的自由に、名古屋市内の水域や桑名七里の渡しなど木曾三川などの水域に航行できる可能性があることがわかった。

- 堀川では、宮の渡し、納屋橋の浮棧橋、五条橋右岸上流の船着き場での乗下船と、朝日橋浮棧橋へ航行して、安全に運航できるを確認できた。
- 建物所有者の意向確認、港湾管理者との協議、河川管理者との情報共有、他の利用者との調整連携、遊船会社の運航手続きなど具体的な航行実績と水深測量など運航に必要な既存施設の実測データが得られた。

3

目標達成のために努力したこと（工夫）

- 河川区域であり、港湾区域である水域なので、河川管理者と港湾管理者の双方に確認を行って、接岸・乗下船実験後に指摘注意等を受けない様に細心の注意を払った。
- 接岸された記憶が無い護岸（建物所有者談）への接岸実験なので、水面下の支障物などでの事故等が発生しない様に、事前調査と接岸実験を行った。

データ収集と実績づくりに重点



名古屋には船外機付き和船の実績のある遊船業者が無い。七里の渡し船旅の実績があり、堀川まちネット、あつた宮宿会とも親交のある桑名の舟宿に依頼した。

4

活動で得た学び（みんなに伝えたいこと）

まさに堀川は「木材の川」であり、木材は名古屋と堀川の繁栄を象徴する物質であった。¹⁾

伝建でも、街並み保存でもない、単なる水域と陸域を結ぶ産業施設が、かろうじて「動態」で残る堀川を産業近代化の歴史からも大切にしたい。

- 接岸・乗下船が安全に可能であったことを建物所有者に報告したところ、ご自身が生業中は舟運遺構を残していきたい、河川工事も配慮したものを希望しているとの意思を頂けた。今後の可航調査でも利用を続けることで存命を支援したい。

本丸御殿、木造天守閣が復元された「近世の名古屋城」が甦った時、堀川にはクレーンも残り、運材製材で繁栄した名古屋の歴史が感じられるといいな。



1)中川晃太, 中村晋一郎: 木材業に着目した名古屋・堀川における水辺空間とその利用の変遷に関する研究, 土木学会論文集D1 (景観・デザイン), Vol.74, No.1, 94-104, 2018.

